

2024年12月19日取材

福島県

産地レポート

トマト

(株)ナラハプラントファクトリー
新品種導入で長期・安定多収を目指す

「桃太郎ブライト」

(編集部[取材・文・撮影 三好かやの])



地域概況



↑『桃太郎ブライト』は秀品率の高さが魅力。台木に『グリーンフォース』を使うと、長期間樹勢を維持できます」と青木社長。



← 2021年にJGAP認証を取得。「サンシャイントマト」として出荷している。



↑広大な施設に23,000本の苗を定植。夏秋と冬春トマトの端期に出荷して、高値で販売できるのが強み。

福島県檜葉町は、太平洋に面した浜通りに位置し、温暖で年間日照時間約2000時間。東日本大震災直後、福島第一原発事故の影響で全町避難を余儀なくされましたが、2015年に帰町が始まり復興への歩みを進めています。浜通りでは冬場に晴天の日が多く、太陽光を活用した大型ハウスでのトマトの養液栽培が盛んです。生産者と流通関係者が出荷協議会を結成し、「サンシャイントマト」と名付けブランド化。市場を通して全国へ送り出しています。

← 猛暑に負けないスタミナをもち、色の回りがよく、着色ムラも少ない「桃太郎ブライト」。

福島県浜通りに位置する檜葉町。ここで大玉トマトを生産する(株)ナラハプラントファクトリーは、既存の養液栽培施設を引き継いで、2020年に設立されました。1・1haの大型ハウスに2万3000本の苗を植え付け、年間300tを出荷しています。

いわき市のある浜通りは、年間の日照時間が長く、冬も晴天の日が多いエリア。この気候を生かし、1990年いわき市の「大野水耕生産組合」によって、東北で初めて大型ハウスを活用したトマトの養液栽培が始まりました。

現在は、栽培面積1haを超える生産組織6社が出荷協議会を結成。「サンシ

ヤイントマト」の産地として、ブランド化を進めています。

台木には草勢の強い「グリーンフォース」を

ハウスに入ると明るい太陽光が降り注ぎ、天井近くまでグリーンリーの葉が生い茂る、養液栽培のベッドが連なっています。

社長の青木浩一さんは、トマトの養液栽培を手がけて15年。会社の設立当初から、復興を目指す檜葉町で採用したスタッフ14人を率いて、栽培に当たってきました。

2022年に「桃太郎ブライト」の試験栽培を始め、2023年から本格的に導入しています。「形と大きさが理

想的で、秀品率の高い品種だと感じました」

目指すのは、M、Lサイズ。草勢の強い「グリーンフォース」を台木とし、2本仕立ての苗を使用しています。7月下旬〜8月上旬に定植し、栽培は10カ月以上続きます。最終的に30段目の花房まで収穫するには、草勢を維持できる接ぎ木苗が有効で、理想的なサイズに仕立てて出荷できるのが魅力だと感じています。

猛暑に負けない品種と作型を

ところが2023年の夏、外気が35℃を超える猛暑日が続き、一帯のトマトハウスでコナジラミが大発生。トマト黄化葉巻病が蔓延し、深刻な被害を受けました。同社でも主力品種の植え直しが必要だったほど。耐病性をもつ「桃太郎ブライト」はそこまで被害はなかったものの、7〜8月に定植し猛暑の中で幼苗期を過ごすため、高温の影響は少なくありませんでした。

「来期は品種と定植時期の見直しと防除の徹底で猛暑を乗り切りたい。もちろん『桃太郎ブライト』も作ります」

震災や原発事故、さらに台風による水害を乗り越えてきた「サンシャイントマト」。高温下の栽培に、新品種とともに挑み続けます。